

竜王と白雪姫

コマ夜叉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分の気持ち気づかない鈍感な竜王と
素直なれないクーデレの白雪姫のお話です。

目次

旅行	58
買い物	53
告白	47
相談	42
【短編】 エイプリルフール	39
遊園地	26
師匠	22
オムライス	15
あたま	10
発熱	6
姉弟	1

姉弟

よく『大切なものは失って初めて気づく』と言うけど、別に失う前に気づく人もいると思ってた。

少なくとも俺は、気づいているつもりだった。

竜王戦で名人に3連敗した時、俺は自分の将棋を否定され失った。

あいにも、姉弟子にも酷い態度を取ってしまった。

でも、そのおかげで、俺は大切なものに気づいた。

それ以降からだろうか、最近姉弟子がとても可愛く見えて仕方ない。

最初は、釈迦堂さんの所で姉弟子のドレス姿を見た時だった。

その時は、見慣れない姉弟子のコスプレ姿が新鮮で可愛いと、感じたんだと思っていた。

だが、最近では、いつものセーラー服の時の姉弟子でさえ可愛いと思ってしまう。

そんな中、今日はあいが師匠の家で天衣とJS研のみなでお泊まり会をするらしく、家には誰も居ないので、姉弟子と一対一で将棋をすることになっている。

「ししよー！それでは、行ってきますね！」

あいは、玄関で靴を履きながら言ってきた。

「ああ、師匠や桂香さんに迷惑かけないようにな」

「はい！行ってきます!!」

あいは元気よく返事をし、お泊まり道具を入れたりリュックを背負い家を駆け足で出ていった。

昨日、とても嬉しそうに準備をしていたし、相当楽しみだったんだろう。

俺はあいを見送った後、将棋を指そうと七寸盤の前に座ろうとした時にチャイムが鳴った。

「どちら様ですかー」

正直来る相手は予想できていたが、もし違う人だったら失礼になってしまうと思い、丁寧返事しながら玄関へ向かう。

「私」

一言だけだがすぐに姉弟子だとわかった。

「姉弟子ですなー今開けますから」

「遅い」

「えっ！結構早く開けませんでした？」

「うるさい、早く入れろ」

「すみません、どうぞ入ってください」

俺もいつものように、軽く謝り姉弟子を中に入れた。

俺はさつき、座ろうとした七寸盤の前に座ると、自ずと、姉弟子も向かい側に座る。

「早速ですけれど、始めて大丈夫ですか？」

「大丈夫よ」

姉弟子の声は、いつもより落ち着いていて勝負モードに入ったのがわかった。

「姉弟子、そろそろ休憩しませんか？」

あれから3時間ぐらい経っただろうか、切りがよくなったので、姉弟子に提案してみる。

「そうね」

流石に3時間ぶっ続けは少し疲れたのだろう、姉弟子

は力を抜き体勢を崩す。

「そうだ！姉弟子、お茶飲みませんか？俺、淹れてきますよ」

「いい、八一お茶淹れるの下手だから自分で淹れる」

「……そうですか」

そう言つて姉弟子は立ち上がり台所のほうへ歩いていった。

何か言い返そうと思ったが、俺がお茶淹れるのが下手なのは、事実なので何も言えなかった。

姉弟子がお茶を淹れている間、俺はその姿に見惚れてしまった。

姉弟子の銀色の髪の毛が窓の隙間から入って来た光を反射し、銀色

に輝くその髪は、姉弟子がすこし動いたたびに、揺れその輝く髪の毛先まで見えた。

それが、とても綺麗で目が離せなかった。

「八一、お茶菓子ある？」

「あ、ありますよ」

姉弟子に急に声を掛けられ現実世界に戻って来た俺は、この間買った栗羊羹を2人分手に取り、姉弟子の方に持っていった。

「栗羊羹でも大丈夫ですか？」

「大丈夫、私も好きだから」

そう言い羊羹の包装を開け、食べやすいように切りはじめる。

「俺、あっちまで運びましょうか？」

「お願い」

姉弟子は、切り終わった羊羹の皿をこちらに渡し湯飲みにお茶を入れ始めた。

俺は、その皿をテーブルに運び終わると、その少し後に姉弟子がお茶を持ってきた。

「はい」

「ありがとうございます」

俺の前に置かれたお茶は、とてもいい香りを部屋全体に広げ今すぐにでも飲みたくなった。

姉弟子が座るのを確認した後、俺と姉弟子は手を合わせて

「いただきます」

そう言った後、俺は早速姉弟子が淹れたお茶淹れてを飲む、熱いお茶が喉を通り、ほどよい苦味が舌刺激してとても美味しい。

「姉弟子ー！このお茶凄く美味しいです!!」

「……ありがとう」

俺は素直な感想を言ったが、少し照れているのか、それを隠すようにお茶を飲む姉弟子

「昔、よく2人で食べましたね」

「懐かしいわね」

「あの時は桂香さんがよく、お茶と羊羹を持ってきて2人で食べなさ

「いって」

「そうね」

そう言って姉弟子は羊羹を口に運ぶ
小さな口がもぐもぐ動いて、そんな姿が、とても可愛いと思っ
てしまった。

思うだけならまだ、よかった。

「姉弟子は可愛いなあ」

「えっ!？」

「だから、姉弟子は綺麗だし可愛いなって」

俺はさつき思っていた事が口から出てしまった。

いつもなら、思っただけでも口が滑ることなんて無いのにどうしてだ
ろう？

もしかしたら、この少し懐かしい空間が俺の気を緩めて、つい言っ
てしまったのかもしれない。

「……………」

姉弟子は顔を真っ赤して黙っている。

いつもなら、すぐに何か罵声を浴びせてくるのに何も言っ
てこない、これは、相当怒っていると思った。

「ごめんなさい！姉弟子！俺から言われても嬉しく
ないですよ、気持ち悪い事言っ
てごめんなさい」

俺は苦笑いを浮かべながら謝る。

「……………」

「なんですか？聞こえませんでした」

姉弟子の声があまりに小さくて聞き直してしまっ
た。

「八一のばか!! だいつきらい!!!」

大声でそう言いながら、走って姉弟子は家を出て行く

「あ、姉弟子！待ってください！」

俺は姉弟子を呼び止めるが耳に入っていないのか、姉弟子は止まらな
かった。

「……大嫌いって言われた」

そんな独り言が静かな部屋に響く

さつきまで、とても和やかな空気だったのもあり、その言葉は俺に結構なダメージを与えた。

その日は、姉弟子のことが頭から離れなかったから、将棋をして姉弟子のことを考えないようにした。

発熱

「姉弟子は綺麗だし可愛いな」

さつき言われてた言葉が今も頭から離れない。

凄く嬉しかった。八一が少しでも私のことを見ていてくれて。

前までは、八一の事が好きなのは、私だけだと思っていた。

だけど、そうじゃなかった。

あの小童の才能は女流では最高クラスでプロ棋士にも匹敵するかもしれない。

今は、まだ私のほうが強いけど、あと数年後には、わからない。

私が3段リーグに苦戦している間に私より強くなっている可能性も全然考えられる。

それこそ、あの小童が私より先に女性プロ棋士になってしまい、八一と対局する。

なんて事になってしまったら、私に勝ち目は無いと思う

八一と同じ場所に立ちたい、そのためなら死んだって構わない

その決意は揺るがない

けど、今でも震えが止まらない。

本当に3段リーグを勝ち上がれるのか、指運だけで昇格できたこの私が、あの魔境を抜けられるのかわからない。

みんな命を削って努力している。才能のない私は、他の人の倍、命を削らないといけない

だから今日言われた言葉がとても嬉しかった。

そんな私を八一は少しでも見ていてくれた。それが嬉しかった。

最近、桂香さんにアドバイスを貰って、少し服や髪の毛にも気を使っている。

本当はこんな事している時間はないけど、そうしないと今の私はもつと無駄な事に時間を使ってしまおうと思う、将棋をしている時と八一の事を考えている時だけ、私は恐怖や不安を忘れられる。

その日私は、思考と言う深い沼に沈みながら、眠りについた。

「熱い」

目が覚めて、最初に発した言葉はそれだった。

異変を感じ枕の近くに置いていた目覚まし時計を手取る。

「……12時30分」

普段、学校が休みでもこんなに遅く起きることはない

そして、体が熱くて、意識も少し朦朧としている。

「……体調崩しちゃったか」

昨日、あまり将棋ができなかつたので今日は将棋漬けと思っていたのに、頭がぼーつとして、まともに将棋ができる状態じゃない。

そんな自分の病弱な体に少しイラついた。

「熱、測っておこう」

そう思い体温計を取ろうとゆっくり体を起している時に携帯の着信音が鳴った。

「……誰だろう?」

幸い携帯電話は近くにあったので、電話に出るのは苦労しなかつた。

「もしもし」

「あ、姉弟子ですか、もしもし八一です」

その声を聞いた瞬間今までの体のけだるさを忘れ、意識が一気に冴えた。

「昨日、日傘起きっぱなしでしたよ、大丈夫でしたか?」

それを聞いて自分が急に体調を崩した理由がわかった。

「忘れてた、八一ありがと」

「それは、いいんですけど、なんか姉弟子いつもより声低くないですか?」

「別に、傘はそのうち取りに行くから預かってて」

「姉弟子は日傘がないと体調悪くするんですから気を付けてください」

い」

「ありがと、それじゃあね」

バレたかと思いき少しドキっとしたが私は、八一に心配掛けたくなかったなので、冷静を装いながら話す。

「待って下さい姉弟子」

「……なに」

「やっぱり、体調崩したでしょ」

バレてしまった。そういえば八一はこういう事には結構敏感だったなと思います。

「私の気持ちには全然気がつかないクセに」

「別に、普通だけど」

「嘘です、どれだけ姉弟子と一緒にいると思ってるんですか、それぐらい気付きますよ」

すぐに嘘は見破られたけど、そう言われたのが少し嬉しかった。

「……ごめん」

「やっぱり、今から準備してそっち行くんで待っててください」

「こ、来なくていい！大丈夫だから！」

八一に心配を掛けなくなかったのもあるけど、昨日の今日で会うのが恥ずかしいから来てほしくなかった。

「いい加減にしてください、今から行くんで待っててください」

そう言って八一は私の返事を待たずに電話を切った。

「ど、どうしよう八一が来る、着替えたりしたほうがいいのかな」

まだ寝衣姿の私は着替えようと立とうとした時、体がフラつきベッドに倒れてしまった。

「私、熱出てたんだ」

忘れていた体のけだるさを思い出した。体はさつきよりも熱かった

「八一が来るまで、おとなしくしてよう」

私はおとなしくベッドに寝て八一を待ってるうちに、そのまま寝てしまった。

あたま

姉弟子との電話を切った後、俺はすぐに桂香さんに電話した。

「もしもし桂香さん、八一だけ今大丈夫？」

「八一君ね、どうかしたの？」

「実は、姉弟子が体調崩しちゃって、今から看病しに行こうと思ってるんですけど、あいはどうしてますか？」

「そうなの!! あいちゃんなら、みんなと一緒に研修会に行ってたわ」

「そうですか、もしかしたら帰りが遅くなるかもしれないので、あいも帰ってきたら伝えておいてください」

「わかったわ。八一君、銀子ちゃんのことお願いね」

「まかせてください! それじゃあ行ってきます」

俺は桂香さんとの電話を早々に切り、財布と携帯をポケットに入れて家を出た。

「姉弟子、大丈夫ですかー」

八一のそんな声が聞こえて私は、目を覚ました。

「……んっ、八一」

「ごめんなさい姉弟子、起こしちゃいましたね」

八一は申し訳なさそうに言う

「平気」

「姉弟子、ご飯まだですよね? お粥でも作るのでまって下さい」

「……八一作れるの?」

八一が料理を得意じゃないのは、知っていたので、つい心配で聞いてしまった。

「はい!この前、あいも熱を出してしまってその時に覚えたんです」

「あっそ」

あの小童の名前が出てきたのにイラつき素っ気ない返事をしてしまった。

「起きてるのが辛かったら、寝ててもいいですよ、作って置いて後で食

べても大丈夫なので」

「ううん、だいじよぶ」

少し寝て良くなったのか、起きているだけなら辛くなかった。

「わかりました。すぐ作り終わると思うので少し待ってて下さい」

そう言いながら八一は家に来る前に買ってきたと思われる買い物袋を手に持ち台所に行く

「八一、お水ちょうだい」

私がそう言うと、八一はお粥を作るのを中断しお水を追ってきてくれた。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

私は八一からコップを受け取り一口飲む

「まだ、いりますか？」

「もう、だいじよぶ」

八一は私からコップを受け取ってテーブルに置いてくれた。

「もう出来るので、待っててください」

八一はそう言うと、台所に戻っていった。

私は、八一に看病してもらったのが、嬉しかった。

昔は今以上に体調を崩していたから、よく桂香さんと八一に看病してもらった。

八一はよく「はやく元気になって一緒に将棋しよう」って言った。

そう言ってくれるのがすごくうれしかった。

そんなふうに少し昔の事を思い出していると、八一が小さめの茶碗に入れたお粥を持って来てくれた。

「姉弟子、お待たせしました」

「ありがとう、八一」

「……ねえ……八一……」

「どうかしましたか？」

「……………食べさせて」

「えっ!？」

「ひとりで食べれないから、食べさせて」

いつもなら恥ずかしくて絶対言えないけど、熱で頭がおかしくなっていたのか言ってしまった。

「姉弟子、口を開けてください」

姉弟子は口を開けて俺がお粥が口に入ってるのを待っている。

そんな姿に少し背徳感を感じてしまう

「……………どうですか？」

姉弟子に口にお粥を入れた後、味が心配で聞いてみた。

「……………おいしい」

流石の姉弟子も恥ずかしいのか目を合わせずに言う

「姉弟子、口を開けてください」

姉弟子は口を開けるが、目を合わせようとしない

よく見ると姉弟子の髪の毛は汗で少し濡れていて、近づくと姉弟子の体温が伝わってくる。

それに少し変な気持を覚えてしまい、姉弟子の顔をまともに見れなくなってしまった

「こうしてると、昔の事を思い出さない？」

少し気まずかったので、姉弟子から話かけられたのは、少し助かった。

「懐かしいですね。姉弟子はよく体調を崩してたから俺と桂香さんでよく看病してましたね」

「ねえ、八一」

「なんですか？」

「……………元気になったら私、一番最初に八一と将棋がしたい」

「俺も早く姉弟子と将棋したいです。その為にも、ちゃんとお粥食べてお薬飲みましょう」

「うん、ありがとう」

姉弟子にお粥を食べさせた後、気づいたら姉弟子は寝ていた。俺は特にやる事もなかったので、姉弟子の寝ている姿を眺めていた。なぜかは、わからないけどその姿ならずと見ていられるような気がした。

その姿を見ているうちに俺の手は無意識に姉弟子の頭を撫でていた。

「……………これはヤバイ」

姉弟子の髪は、サラサラでふわふわでなんとも言えない触り心地だった。

「…………マジで癖になりそう」

俺は癖になり、姉弟子の頭を撫でていると

「…………八一なにしてんの」

姉弟子が起きたヤバイ！怒られる！

「べ、別になにもしてないですよ」

俺は一瞬で姉弟子の頭から離し自分の手を後ろに隠す

「…………もつとやって」

「えっ？」

てつきり怒られると思ってたので、思わず聞き返してしまった。

「…………頭撫でて」

「いいんですか？」

「いいよ」

俺は姉弟子の許可を得たのもう一度姉弟子の頭に手を置き撫で始める

「んっ…………」

「へ、変な声出さないでくださいよ」

「だって、気持ちよくて…………」

姉弟子は恥ずかしそうに言う

「それならよかったです」

俺は姉弟子の頭を撫でながら言う

「ねえ、八一」

「どうかしましたか？」

姉弟子の頭を撫でながら俺は言う

「私が寝るまで、頭撫でてて」

「フフ、今日の姉弟子は甘えん坊さんですね」

「うるさい、ばかやいち」

姉弟子は照れくさそうに言う

「寝るまで一緒にいるので安心してください」

「ありがとう」

「これくらい、全然いいですよ」

その後すぐに姉弟子は寝てしまった。

俺はその日、姉弟子の頭の触り心地が忘れられなかった。

オムライス

「ししよう！聞いてるんですか！」

「ご、ごめん、なんだっけ？」

あいの声で俺は現実引き戻された

「最近、ずっと上の空です！」

「そ、そうかな、ごめん」

「……………女ですか」

あいの雰囲気が一瞬にして変わり俺の方をじっと見ている

「ち、違うって！」

「それならいいですけど」

あいはいつも雰囲気に戻り言う

「……………それじゃあ私、学校に行って来るんで」

「い、行ってらっしゃい」

あいはとても不機嫌そうに家を出ていった。

「やっぱりそう見えるよな……………」

あいに言われなくても自分が最近上の空なのは気がついていた。

「……………姉弟子」

あの日以来俺は姉弟子のことばかり考えていた。

頭の触り心地は今でも忘れられない

あいの頭を撫でて気を紛らわせようとしたが姉弟子への気持ちが

治まらなかった。

「やっぱ好きなのかな……………」

俺はこの気持ちがよく解らない、恋愛感情なのか、家族愛なのか、そ

れともただ小動物的に可愛がってるだけなのか

俺がそんなことを考えてると、家のチャイムがなった。

誰だろう？今日は平日だし宅配便だろうか？

俺はそう思いながら玄関に向かう

「はーい」

そう言いながら開けたドアの先に立ってたのは予想外の人物だった。

「あ、姉弟子! どうして!」

「元気になったら将棋するって言ったでしょ」

姉弟子はそう言いながら家の中に入る

「今日、平日ですよ学校はどうしたんですか?」

「創立記念日で休みなの」

「姉弟子の学校は創立記念日が一年に何回もあるんですね」

「うるさい、今日のはホントよ」

姉弟子は学校を休む時、創立記念日と言うので今日が本当の創立記念日なのか、わからなかった。

「まあ、いいですよ。体調は本当に大丈夫なんですか?」

「うん、おかげさまで」

姉弟子は将棋盤の前に座るや否や駒を並べ始める

「姉弟子、ひとつ勝負をしませんか」

「なに?」

姉弟子は駒を並べながら聞く

「将棋で負けた方が勝った方の言う事をなんでも一つ聞く、なんてどうでしょう」

「な、なんでも!」

姉弟子の駒を並べてた手は止まり俺の方を見ている

「はい、なんでもです」

「……わかった。受けて立つ」

「じゃあ、五番勝負でいいですか?」

「いいけど、もちろん先行は譲ってくれるんでしょう?」

「いいですよ」

そう言ってる間に駒は並べ終わっており、始める準備は整っていた。

「お願いします」

俺と姉弟子は声を合わせて言い対局が始まった

「負けました」

「ありがとうございます」

姉弟子の投了で対局は終わり、結果は俺の3連取で終わった。

「……………」

姉弟子は負けて不貞腐れて黙っている

「そ、そうだ！姉弟子そろそろお昼なのでご飯にしませんか？」

「……………」

「俺が作りましょうか？それともどっか食べに行きますか？」

「……………」

「え？」

俺は耳を疑い聞き返す

「私が作るから八一は座ってて」

「う、家今食材無いですし、どっか食べに行きましょうよ」

「まってて、見てくる」

姉弟子はそう言うと言と冷蔵庫の方まで行き中身を確認する。

「結構有るじゃない、これだけ有れば普通に作れるわよ」

そうだった。あいが来てから手料理中心になったから食材は買い置きしててなんだった。

「あ、姉弟子は座っててくださいここは、弟弟子である俺が作りますから」

「大丈夫、この前桂香さんと料理の特訓してちゃんとお墨付きを貰ってきたから」

「それならいいですけど……………」

姉弟子が料理をすると、料理のような何かを作ってしまうので心配だったけど、桂香さんのお墨付きなら少しは安心できる。

「八一、何か食べたいのがある？」

「姉弟子におまかせします」

「そう」

正直いくら料理の特訓をしたとはいえ、どこまで料理の腕が上達したかわからない

少なくとも前よりは酷くないと信じたい。

「あ、姉弟子なにか手伝うことはありますか？」

俺は姉弟子の料理が気になって聞いてみる。

「だいじょうぶ、八一は座ってていいよ」

「うっ、わかりました」

俺は、観念しておとなしく待つことにした。

「すごく手際がいいな……」

いつもの姉弟子からは、想像できないくらい手際が良くビックリした。

それに、いつも臭う変な刺激臭もしない、もしかして本当に大丈夫なのだろうか

「八一、運ぶの手伝って」

「わ、わかりました」

どんなものができたか、ドキドキしながら俺は台所に向かう

「……オムライスですか」

「なに、悪い？」

俺の反応が気にいらなかったのか少し怒り気味に言う

「ほら、早く運んで」

「は、はい」

オムライスをテーブルに運び、姉弟子と向かい合うように座る

「い、いただきます」

「召し上がれ」

姉弟子は俺の感想を待っているのか自分は食べずに俺の方を見ている。

見た目は普通のオムライスだったが、味はわからないので、まだまだ安心はできなかつた。

俺は恐る恐るオムライスを口に入れた。

「美味しい……美味しいですよ姉弟子!!」

「……ありがとう」

姉弟子は嬉しかったのか少し顔を赤くし眼を逸らして言う

「それにしても、どうしてこんなに急に料理うまくなったんですか？」

「桂香さんが、私は料理をレシピ通りに作らないから美味しくならないって」

「何かアレンジでもしてんですか？」

「八一、食生活偏ってそうだったから、体に良さそうな片っ端からいれてた」

「そ、そうですか……」

俺は姉弟子が何を料理に入れてたか気になったけど、聞くのが恐ろしくてそれ以上追及しなかった。

「そう言えば八一、さっきの勝負のやつ、私なにすればいいの？」

「ご飯を食べ終わり少し休憩してる時に姉弟子が思い出したように言う。」

正直自分からは言い出し難かったので姉弟子から言ってくれて助かった。

「じ、実は、頭を撫でさせてほしくて……」

「え!？」

姉弟子はお茶を飲んでいた手を止めて言う

「この前、姉弟子が熱出した時に俺が頭撫でてたじゃないですか、実はそれ以来もう一回撫でてみたいなって……」

姉弟子は俯いてこっちを見ようとしない

「ご、ごめんなさい急に気持ち悪い事言って、やっぱり嫌ですよー!」

「……いいよ」

姉弟子は俺にギリギリ聞こえるぐらいの声で言う

「……隣行ってもいいですか?」

「うん……」

俺は自分の座ってた椅子を姉弟子の隣まで持って行き、そこに座った。

「……それじゃあ失礼しますね」

ゆつくりと姉弟子の頭の上に手を置き髪を撫でる

「んっ……」

姉弟子は少し声を出すが、恥ずかしいのか、それを隠すようにすぐ黙る

「姉弟子、痛くないですか？」

「……ううん、痛くない」

姉弟子はそう言うのと俺の体の方に体重を掛けてもたれかかってくる。

正直超かわいい、なんだこの生き物。

「ねえ、姉弟子」

「……なに」

「昔、よくこうして姉弟子の頭を撫でてましたね」

「……そうだっけ」

姉弟子は惚けるように言う

「師匠の家で怖いテレビを見て、寝れないから頭撫でてって、俺に言っ
てたじゃないですか」

「うるさい、いいでしょ別に」

「銀子ちゃんが俺の姉弟子でよかったです」

「きゅ、急になに言い出すのばか八一」

流石の姉弟子もこの言葉は予想してなかったのか少し驚いている

「ごめんなさい、でもありがと姉弟子」

「……なんでありがとうなのよ、変態」

「なんで変態なんですか！何もしてなかったじゃないですか！」

「……私の頭撫でてるじゃない」

「そ、それは………」

そんな、少し恥ずかしいけど、とても心地の良い空間は突如終わりが
告げた

「ししよー！ただいま帰りましたって………あれ？おばさんと
二人で何やってるんですか」

「な、なにもやってないよ！それよりあい今日は学校早かったね」

「………そんなことってなんですか？」

あいの雰囲気はどんどん暗くなり、笑ってはいるが目は笑ってな
かった。

どうやら、地雷を踏んでしまったようだ。

「なに？もしかして八一に頭撫でられてるのが羨ましかったの？」

姉弟子はあいの威圧にもおろともせずと言う

「おばさんは邪魔なんで黙っててください」

「邪魔なのは急に八一の家に来た小童、あんたでしょ」

「ふ、二人とも落ち着いて」

さつきまでの心地いい空間は一瞬消え去り、地獄と化していた。

その後の結果は言わなくてもわかると思うが、あいと姉弟子の言い合いが小一時間続きその後、姉弟子が大激怒して帰り、俺はあいにその日ずっと怒られた。

ちなみに、その日の俺の晩御飯は出て来なかった。

師匠

その日、将棋会館で桂香さんと偶然会い一緒にトウエルブで一緒に昼食を食べる事になった。

「銀子ちゃんと二人つきりでご飯なんて、すごい久しぶりね」
「そうだね」

「あいちゃんが来たりとか色々忙しかったからね」

桂香さんは少し懐かしむように言う

「そうだ！私、銀子ちゃんに聞きたい事があったのよ」
「なに？」

「八一君と何かあったでしょ？」

「……別にないけど」

唐突すぎる質問に私は驚いてつい誤魔化してしまった。

「銀子ちゃんの看病に行った時以降、八一君の様子が少し変なのよ、銀子ちゃんとかかあったのかなって思ってたんだけど、違う？」

桂香さんは、ニヤニヤしながら言う

これは、完全に気がついてる時の顔だ

「……桂香さんに隠し事は通用しないね」

「あたりまえよ！それで、何があったの？」

「八一が私の頭を撫でるのが好きみたいで、2人で合うと頭撫をでた
いって……」

自分で言っているうちに恥ずかしくなり、自分の体温が上がってる
のがわかった。

「思い出すだけで顔真っ赤にしちゃって、銀子ちゃんったら可愛いわ
ね」

「か、からかわないでよ桂香さん」

「それにしても、銀子ちゃんの頭を撫でるなんて八一君、銀子ちゃんのこと好きなんじゃないの？」

「そんな事ない、八一の事だからあの小童共の頭も沢山撫でてるに決
まってる」

「そ、それは否定できないわね……」

そう言うときつきまで元気だった桂香さんは急に黙ってしまった。

「な、なんかごめんね」

「桂香さんは悪くない、悪いのはあのロリコンだから」

悪いのは八一、幼女にばかり優しくして私の事なんて全然見てくれない、私の頭を撫でたり、可愛いって言うのは小学生に言うのと同じ気持ちで言ってるんだらう

「そうだ！今日、銀子ちゃんに渡したい物があったのよ」

「遊園地のチケツト？」

桂香さんが取り出したのは、遊園地のペアチケツトだった。

「この前、商店街の福引で当たったのよ、だから銀子ちゃん達にあげようと思って」

「いいの？桂香さんが当たった物なのに」

「いいのよ、明日にでも八一君と行ってらっしゃい」

「でも、明日は日曜日だしあの小童が……」

小童がこの事を知ったら、邪魔してくるに違いない

「その辺りも抜かりないわ、明日お父さんが鏡州さん達と研究会をするらしくてね、家にいないのよ」

「今回は師匠の家じゃないのね」

「なんか、毎回だと桂香に悪いってお父さんがね、それで、私が一人は寂しいからって理由であいちちゃん達をお泊りに誘ってるのよ」

「……桂香さんありがとう」

私は桂香さんが自分のためにしてくれた事が素直に嬉しかった。

「それはいいんだけど、銀子ちゃん一つ約束してほしいことがあるの」「なに？」

桂香さんの雰囲気が変わったのがわかり、私は唾を呑んだ。

「明日、絶対に八一君との関係を進展させること」

「えっ!？」

ずいぶんと拍子抜けしていたので私は驚きの声を上げた。

「そんなに驚く事じゃないと思うけど」

「だって、急に真面目なるから、何かとんでもない約束かなって」

「銀子ちゃんは頑張っても結局最後にはヘタレになっちゃうでしょ、

そのたの約束よ」

「わかった、約束する」

桂香さんにここまで用意させて、何もできなかつたなんて桂香さんに悪い、だから今回こそは本気で頑張ろうと思った。

「それに、八一君はロリコンと言う重い病を患っている、それを治してあげられるのはもう、銀子ちゃんしかいないの」

「桂香さん、私が言うのも変だけど中学生も世間的にはロリコンの部類だよ」

「小学生よりはマシよ!」

「だから、明日のデートで絶対に八一君を落としてきなさい、今の銀子ちゃんならできるわ!」

桂香さんは周りの事なんて気にせず、大声で言う

「……八一とデート」

急すぎなので実感がなかつたけど、明日八一とデートするんだ。

そう認識すると自分で顔が赤くなっているのがわかつた。

「ほらほら銀子ちゃん、今から顔赤くしてどうするのよ明日は本気で八一君を落として行くのに」

「で、でも八一とデートだなんて私どうすれば……」

「だから今から特訓よ!明日デートのために!」

桂香さんは、今にもやる気でその熱気が伝わって来た

「銀子ちゃん、今からする特訓は銀子ちゃんには辛いかしれない、それでも付いて来れる?」

「私、頑張ります!桂香さん、いえ師匠!!」

私は桂香さんの変なテンションに影響され自分も変なテンションになっていた。

「よく言つたわ銀子ちゃん、それじゃあ今から八一君研究会よ!」

「お願いします師匠!」

私達は注文していた料理が来て自分達がトウエルブに来ていたのを思い出し我に帰つた。

しばらくの間ここに来るのは恥ずかしいから控えようと思った。

遊園地

「うわあ〜結構混んでますね」

「そうね」

今日は、姉弟子の誘いで遊園地に来ていた。

なんでも、桂香さんが商店街の福引で遊園地のペアチケットを当てたらしく、自分には行かないからと姉弟子にあげたそう。

姉弟子だって本当は桂香さんと行きたかっただろうけど、その桂香さんが行かないということで消去法で俺が誘われたんだろう、それでも俺は姉弟子と一緒に遊園地に行けることが嬉しかった。

「少し油断したらはぐれちゃいそうですね」

日曜日ということもあり、家族、友人どうし、カップルなど様々な人達で遊園地はとても賑わっていた。

「何から乗りましょうか？」

「あれ、乗ってみたい」

姉弟子が指を差した方向にはコーヒーカップがあった。

「いいですね！ それじゃあ行きますか」

「待って」

そう言うと姉弟子は俺の手を掴んできた。

「どうかしましたか？」

「??手、繋いで」

予想外の言葉に驚いたが姉弟子は少し恥ずかしかったのか目を反らし下を向いている。

からかっているわけではなさそう。

「繋いでいいんですか？」

「??はぐれると困るから」

姉弟子は俺と手を繋ぎたいのかな、と思いついていた部分もあったが、ただ迷子になりたくないだけだと知り、やっぱり姉弟子は俺の事をただの弟子としか見てないと再確認してしまった。

「そ、そうですね！ はぐれると困りますもんね」

「……うん」

そう言うのと姉弟子は俺の手を握ってきた。

昔、何度も繋いだその手は、昔と変わらないはずなのに俺は手握られた瞬間今まで感じたことのない胸の高まりを感じた。

「どうしたの？ 早く行く、八一」

少し固まっていた俺を心配に思ったのか、隣にいた姉弟子は手を繋ぎながら不思議そうに俺の顔を覗きこむ。

「な、なんでもないですよ！ ほら、行きましよう姉弟子」

姉弟子の仕草があまり可愛かったので俺はその気持ちを誤魔化すように姉弟子の手を引き歩き出した。

「コーヒーカップはあまり並んでませんね」

コーヒーカップの列に着く頃には、少し姉弟子と手を繋ぐ事にも慣れて、胸の高まりも収まっていた。

「姉弟子はコーヒーカップ好きなんですか？」

「別に」

「あれ、そうなんですか？ てつきり好きだと」

「そもそも遊園地なんて来るの昔師匠達と来たとき以来だし、よくわからない」

「そういえば俺達は昔から将棋ばかりで、こういう場所にはほとんど無縁なので、よくわからないのが当然だ。」

「次の方どうぞー」

少し姉弟子と話してるうちに俺達の番が来た。

俺は姉弟子の手を放し席に座ると姉弟子も少し後に向かい合うように座った。

「初めてだから楽しみ」

「昔乗りませんでしたっけ？」

師匠達と来た時は俺もいたし、子供が乗れるのなんて限られてるからコーヒーカップなら乗ってるはず

「私達、将棋がしたいってすぐに帰ったじゃない」

「???そうでしたね」

そういえばそうだ。あの時は桂香さんも来てくれたのに俺達は口を揃えて将棋をしたいと言い2人には悪いことをしてしまった。

そんな事を思っていると、周りのお客さんも席に着いており、従業員の合図でコーヒーカップが動き出す。

「動きましたよ姉弟子！ ハンドル、回してみてください」
「わかった」

姉弟子は自分の目の前にあるハンドリングを回すが加減がわからないのか凄くゆっくり回す。

「姉弟子！ もっと速く回して下さい」
「う、うん」

今度はものすごい勢いでハンドルを回す姉弟子
それに合わせてコーヒーカップが高速回転する。

「これ！ どうやって止めるの八一！」
「ハンドルを逆に回してみてくださいー！」

姉弟子はハンドルを逆に回し、回転を止めようとするが、勢いに負け手が弾かれてしまう。

「姉弟子！ 俺が止めるんで離れてください！」

その間にもコーヒーカップは高速回転し、俺と姉弟子の三半規管を刺激して来る。

「やいち??気持ち悪い??」

「耐えてください姉弟子！ もう少しの辛抱です！」

姉弟子の顔色が目に見えて悪くなり、体があまり強くない姉弟子は今にも限界そうだ。

「やっと収まってきましたね、姉弟子大丈夫ですか？」
「??うん、なんとか」

回転は収まったけど姉弟子はまだ気持ち悪そうだ。
すると、コーヒーカップの動きが止る。

どうやら終わったようだ。

「終わりましたよ姉弟子、ほら、掴まってください」

無言で俺の腕に掴まる姉弟子

「ちよっとベンチの方で休みましようか」

「???
???ありがとう」

そのまま俺は姉弟子を誘導し、近くのベンチに座らせた。

「姉弟子、大丈夫ですか?」

「??さつきよりは気持ち悪くない」

「俺、飲み物でも買ったの?」

「いない、??一緒にいて」

その言葉に不意にもドキドキしてしまった。

姉弟子はただ、一人でいたくないだけで言ってるだけなんだとわかっているはずなのに。

「酷いようなら帰りますか?」

「落ち着いてきたし大丈夫」

少し心配だったが本当に落ち着いたのか、姉弟子の顔色はさつきよりよかった。

「ごめんね、八一」

「ん? 何がですか?」

俺は別に姉弟子に謝られるようなことをされた覚えはないから不思議だった。

「私、体弱いから迷惑かけちゃって?」

姉弟子は凄く申し訳なさそうに言う

「そんなこと気にするなんて姉弟子らしくないですよ」

「でも、私が誘ったし?」

「気にしないでいいですよ、それより姉弟子、この後乗りたいのとかありますか?」

「このまま話しても終わらないので、強引に別の話題に切り替える。」

「激しくないならなんでもいい」

「じゃあ、お化け屋敷で」

「え?」

姉弟子は驚き、開いた口が塞がらない。

とても予想通りの反応だった。

「俺、お化け屋敷って行ったことないから、一回行って見たかったんで

すよね」

「そ、そうなんだ?？」

一応返事はしてくれたが、その顔は少し引きつっている。

「姉弟子はどうですか、お化け屋敷」

「??行きたくない」

姉弟子がホラー系が苦手なことは知っている。

だが、それで諦める俺ではなかった。

「姉弟子、もしかして怖いんですか?」

「べ、別に怖くないし?？」

姉弟子は強がるように言うが、体が少し震えている。

「俺、姉弟子とお化け屋敷行くの楽しみだったのにな」

「??ほんと?」

姉弟子は案外優しい所があるのでこういう言い方をすると姉弟子の機嫌次第ではあるが、結構成功率は高い。

「??八一が側にいてくれるなら行ってもいい」

「ほんとですか!」

俺がどうしても姉弟子とお化け屋敷に行きたかったのには理由があった。

それは、怖がっている姉弟子が見たい、ただそれだけの理由だった。自分でも性格が悪いと思うが、姉弟子の怖がる姿を見たくて仕方がないのだ。

「それじゃあ行きましょう!」

「??うん」

姉弟子はそう言うのと俺の方に手を出してきた。

「どうしました?」

「??繋いで」

姉弟子の言葉を聞いてその意味を理解した俺は姉弟子の手を握りそのまま2人でお化け屋敷に向かった。

「やいちい??こわいよお??」

俺の手を握り怯えている姉弟子

「大丈夫ですよ姉弟子、怖くないですから」

俺は姉弟子をなだめるように言う

正直、お化け屋敷なんて子供騙しだと思っていたが、それは甘い考えだった。

お化け屋敷内の僅かな明かりも点いたり消えたりしており、時々人間の呻き声のようなものも聞こえる。

姉弟子の圧倒的可愛さで緩和されているが実は相当怖い。

「こわいよお??」

姉弟子は俺の手をさつきより強い力で握る。

「安心してください、俺はどこにも行きませんから」

「やいちい??」

涙目になりながら姉弟子は言う。

「結構歩いたと思んですけどまだ出口は見えませんか」

お化け屋敷に入ってから結構歩いたはずだが出口は見えず、それらしきものもない。

「やいち??あれ??」

姉弟子は震えながら指を差して言う。

その先には、頭のない落ち武者のような物が座っていた。

「だいじょぶですよ、ただの置物ですから」

「そ、そうね」

ただの置物だとわかり少し安心する姉弟子。

それを確認した後、先に進もうと歩こうとした時、金属の擦れるような音が微かに聞こえた。

「ん? 今なにか聞こえませんでしたか?」

「??わかんない」

たしかに聞こえたきがしたが俺の勘違いだったみたいだ。

「勘違いだったみたいですね、行きましようか姉弟子」

そう言い姉弟子の方を見ると姉弟子は先ほどの頭の無い落ち武者を見ていた。

「どうしました?」

「あ、頭が……」

姉弟子にそう言われ落ち武者の方を見るとさつきまでは無かったはずの頭があった。

その頭は血だらけで生々しい切られた傷跡のようなものが複数ついていた。

「は、早く行きましよう姉弟子!」

俺は返事を待たずして姉弟子の手を引き、落ち武者から逃げるように先を急ぐ。

そうして、少しするとあの落ち武者は見えなくなり少し明るい場所へ出た。

「すいません姉弟子急に手をひっぱちやって、痛くありませんでした?」

「いいよ、私も怖かったし?」

怖がってた姉弟子も少しは落ち着いたのか少し安心した表情をしていた。

「姉弟子! あれ、出口ですよ!」

「ほんとだ」

姉弟子も気づいたのか出口の方を見た。

この辺りが少し明るかったのは出口の光が少し入ってきていたからみたいだ。

「ようやく出口ですね??行きましようか姉弟子」

俺は出口へ向かおうと歩き始めたが、姉弟子はその場から動こうとしなかった。

「行かないんですか姉弟子?」

「こわい」

「え?」

よくわからないことを言う姉弟子。

出口はもうすぐだし、光も入ってきて少し明るい、それで怖いなんてことはないはずだ。

「出口もすぐそこだし、怖いなんてことはないでしょ?」

「う、うるさい！ いいからこつちに来なさい！」

怒り気味に言う姉弟子、その意図はわからなかったがおとなしく従い姉弟子の近くに寄った。

「腕、貸しなさい」

そう言つて俺にピッタリとくっつき自分の腕を絡めてくる。

腕組み、と呼ばれるやつだった。

「あ、姉弟子、何するんですかー！」

「うるさいクズ、早く行くわよ」

俺の腕を組みながら歩き出す姉弟子、それに引つ張られるように俺も歩き出す。

さつきまでの怯えていた姉弟子はどこへ消えたのか、もう、いつもの姉弟子だった。

そのまま状態のまま2人で歩いていると出口の前に辿り着きお化け屋敷の外へ出た。

「なんだか、外の空気を吸うのが随分久しぶりな気がしますね」

「そうね」

姉弟子はいつも通りに言うが腕はまだ組んだままだった。

「あの??姉弟子??もう外ですけど」

少し恥ずかしくなり、姉弟子も放す気はないようなので自分から話しを切り出した。

「だから？」

姉弟子は堂々と言う

「いや、もう外ですし怖くないですよね？」

「私、お化け屋敷が怖いなんて行ってないし??」

「なんですかそれ??」

よくわからない事を言う姉弟子。

やっぱり俺をからかっているのだろうか、これじゃあまるでカッパルだ。

「いいから次、行くわよ」

「はいはい、わかりましたよ」

俺達はそのま腕を組みながら次に行くアトラクションの元へ向

かった。

「暗くなってきたわね」

「そうですね」

あのお化け屋敷の後、激しくない物を中心に園内を回った。
ゴーカート、メリーゴーランド、立体迷路なんて物あった。
「そろそろ帰りますか？」

もう行つてないのはジェットコースター系しかないしちようどよ
かった。

「私??観覧車乗りたい??」

観覧車は盲点だった。

思い込みかもしれないが遊園地の最後といたら観覧車だろう。

「いいですよ、行きましようか」

「??うん」

俺達は観覧車の方へ向かった。

当然、腕は組んだままだった。

「景色が綺麗ですね」

「そうですね」

観覧車はゆっくりと頂点へと上がっている。

「楽しかったですね」

「そうですね」

お互いに会話があまり弾まない。

そんな中、観覧車の動く音だけが響く

「映画とかだと観覧車が一番高くなった時にキスをする、みたいなもの

ありますよね」

会話に困ったあげく出てきたのはそんな話題だった。

そんなことを言っても余計に気まずくなるだけなのに。

「そ、そうなんだ」

思っていた通り姉弟子は返事に困り気まずい雰囲気になる。

「??姉弟子はそういう相手いるんですか?」

自分でも変なことを聞いているのはわかっていた。

姉弟子には前に似たような事を聞かれたが、姉弟子の方はどうなんだろうか。

「いない??」

姉弟子は変わらず外の景色を見ながら言う。

「??じゃあ好きな人は?」

聞いてしまった。この事を聞いてしまえば俺は……

「???」

その言葉を聞いた瞬間俺の心は締め付けられる。

気のせいか呼吸をするのも苦しい。

「ご、ごめんなさい??もう一回いいですか?」

聞こえていた。聞こえていたけど認めなくなかった。

「??私、好きな人がいる??」

姉弟子は確かに言った。好きな人がいると

「そう??ですか??」

苦しい、すごく苦しい、今まで感じたことのないくらい苦しかった。

「ど、どんな人なんですか?」

聞きたくない、でもすごく聞きたい、そんな矛盾した思いが体中を駆け巡る。

「??すごく優しくして??すごくかっこいい??私が、ずっと??ずっと前から好きな人??」

姉弟子は少し愛おしそうに言っている。

胸が張り裂けそうだ。

自分がなんでこんな思いをしているのかは、わかっている。

本当は少し前から気がついてた。でも、その気持ちは無意識に心

の奥底にしまっていた。

こうなってしまうと知っていたから。しかし、もうだめだった。今日、完全に気づいてしまった。

俺は姉弟子、空銀子が好きなんだ

「うまくいくといいですね」

俺は自分の気持ちを隠し、胸の痛みを耐えながら、できるかぎりの笑顔で言う

「???ばか」

姉弟子のそんな言葉と観覧車の音が響く。

いつの間にか観覧車は頂上をとつくに過ぎていた。

【短編】

エイプリルフール

「今日って何の日か知ってる?」

俺の家で2人で将棋を指している時、姉弟子は唐突に言ってきた。「誰かの誕生日とかですか?」

将棋を指していたし心当たりもなかったので適当に返事をする。

「4月1日、エイプリルフールよ」

「そういえば、そんな日ありましたね」

ずっと将棋漬でイベント事には無縁なのですっかり忘れてしまっていた。

「実は私、女じゃなくて男なの」

そう言いながら駒を動かす姉弟子

正直、このタイミングならどんな事を言っても嘘だとわかってしまう。

「だからそんなにツルペタなんですね」

「ここは嘘だと言わずに姉弟子の話しに乗ってみる。

「ぶちころすぞわれ!!」

姉弟子は血相を変えて怒り出し、手に持っていた百折不撓の扇子を俺に向かって投げてきた。

「イタッ! ちよつと、投げないでくださいよ!」

姉弟子のコントロールが悪かったのか、俺はなんとか避けた。

「姉弟子! 自分の扇子なんだから大切にしてくださいよ!」

ほんと、百折不撓君は折られたり、投げられたりと、まったく不憫な子である。

「黙れ! バカ! 変態!」

「俺が悪かったですから、落ち着いてください!」

俺がそう言くと、姉弟子は自分の投げた扇子を拾いに行き、その後同じ場所に座った。

「それにしてもなんで急にエイプリルフールなんて、姉弟子、そういうの興味ないって言ってませんでした?」

姉弟子がエイプリルフールという存在を知っていたことに驚いて

いた。

だって、ガンダムを将棋用語だと思おう人だよ、この人

「別にいいでしょ、なんとなくよ」

「そうですか……」

そんな風に言われてしまったのは、何も言い様がないので、そのまま黙ってしまおう。

「実は俺、ガチのロリコンで、10歳以下が恋愛対象なんです」

俺もなんとなく嘘をつたくなったので、少し考えたがこんな嘘しか出て来なかった。

「うん……知ってる……」

姉弟子は嘘だと受け取らなかったのか、なんとも言えない顔をしていた。

「冗談ですよ！ エイプリルフルじゃないですか！」

「誤魔化さなくてもいいよ八一、私も頑張って受け止めるから……」

姉弟子は哀れむように俺の方を見てくる。

「嘘ですから！ 信じてくださいよ！」

「ほんと？」

「本当ですから！」

「……………よかった」

なにがよかったのかは、わからなかったが、俺も信じてもらえてよかった。

「知ってる？ エイプリルフルで嘘をついていいのは午前中までのよ」

「へえ〜 初めて知りました」

てつきり、いつでも嘘ついていいと思っていたので少し驚きだった。

「今が11時58分だから、もう終わるわね」

「ギリギリでしたね、一回は嘘をつけてよかったです」

あいが帰って来たら、エイプリルフル事を教えてあげよう、なんて考えていると姉弟子が口開いた。

「ねえ、八一」

どうしたんだらうか？

さつままでとは、姉弟子の雰囲気違った。

「どうしました？」

ふと、時計を見ると、今は11時59分だった。

「私、八一のことが好き」

「えっ!？」

姉弟子はとんでもないことを言った。

信じられない、姉弟子は俺のことを嫌いなはずなのに

「……嘘ですよね姉弟子？」

凄く嬉しかったが、直ぐにエイプリルフルだと思出し、姉弟子に聞いてみる。

「……………時間」

姉弟子言われた通りに時間を見ると今は12時ピッタリ午後であつた。

「姉弟子、それって……………」

正直、突然すぎて気持ち追いついていない

「自分で考えなさい、私は帰るから」

そう言い、素早く立ち上がり歩き出す姉弟子

「姉弟子、将棋の途中ですよ！」

「急用を思い出したの！」

姉弟子は強く扉を閉め家を出て行った。

「……………どっちなんですか」

姉弟子が出て行き、静かになった部屋に自分の独り言が響いた。

姉弟子がああの言葉を言い終わった時、午前か午後、いったいどっちだったのだろうか。

相談

姉弟子と遊園地に遊びに行ってから一週間がたっていた。

それから姉弟子とは会っていない。

タイミングが無かったのもあるし、それ以上に、なんとなく気まずかった。

少し時間を置けばこの気持ちが収まってくれらると思っていたが、そうではなかった。

姉弟子に対しての気持ちはどんどん大きくなり、今では、銀将の駒をただただ姉弟子の事が頭に浮かんでしまう程度には症状は悪化していた。

「おい八一、手が止まってるぞ」

「す、すいません」

今日はいいと一緒に、生石さんの所で軽い研究会のようなものと振り飛車を少し教わりに来ていた。

「どうした、何かあったのか?」

生石さんは自分のタバコを一本取り出し、火をつけた。

「別に、何もありませんよ」

「嘘つけ、そんなに上の空で何もないわけないだろ」

少し恥ずかしくて誤魔化してしまったが、生石さんにはあつさりで見抜かれてしまった。

「それで、どうしたんだ?」

あいは今、他のお客さんと将棋をしており、言うには悪くないタイミングだった。

恥ずかしくはあったが、1人の男として生石さんに相談したいとも思っていた。

「その前に、今日、俺に隠して姉弟子と研究会、なんてのはないですよね?」

これだけは絶対に確認しておきたかった。

生石さんと話している時にうっかり姉弟子に聞かれるのだけは、避けなければならない。

「今日と呼んでないが………つてことは、銀子ちゃんについての悩みなのか？」

「……まあ、そんなかんじです」

「銀子ちゃんが原因だなんて、ますます気になるな」

生石さんにしては珍しく興味津々に見えた。

「……生石さんは、恋ってどう思いますか？」

「いきなりどうした？ さっきまでの話とずいぶん飛ぶじゃないか」

驚き、タバコを吸う手が止まる生石さん。

当然だ、悩み相談を持ちかけられてる相手からいきなり恋についてどう思うか、なんて聞かれたら驚くに決まっている。

「飛んでません、それが俺の悩みなんです」

「………それってもしかして」

俺の言いたいことを察した様子生石さん

「お察しの通り、俺、姉弟子のことが好きみたいなんです」

言ってしまった。

まだ誰にも言ったことの無い自分の本当に気持ち、他の人に言ってしまうたら、もう本当に後戻りはできなくなってしまおうだろう。

「つまり、銀子ちゃんのことを考えすぎて将棋も手につかないと」

「………そうなんです」

生石さんはタバコの火を消しながら言った。

「そんなに好きなら、告白でもすればいいだろ」

生石さんの言ってることは正しいと思うが、俺が告白なんてしたらきっと姉弟子を困らせてしまおうだろう。

「姉弟子、他に好きな人がいるらしいんです。それに、3段リーグも始めるのに俺が告白したら姉弟子は将棋に集中できないと思うんです」

「そうか……」

こんなの本当はただの言い訳でしかない。

本当は姉弟子にフラれるのが怖くて告白できないだけだった。

「え!? 銀子ちゃんの好きな人って八一、お前じゃないのか？」

意味のわからないうことを聞いてくる生石さん

姉弟子が俺のことを好きなんて方に一つもありえないのに

「違いますよ、姉弟子は俺のこと、ただの弟弟子としか思っていないですよ」

「それって、本人が言ってたのか？」

そんなことを聞き返してくる生石さん

もしかしてこの人は姉弟子が俺のことを好きだと思っていたんだ
ろうか？

だとしたら、俺は恋愛相談をする相手を間違えたのかもしれない

「……そうです、他に好きな人がいるって……」

姉弟子の言ってたこと思ひだし、少し悲しい気分になってしま
う。

「……まったく、お前って奴は……」

理由はわからないが、俺を憐れみの目で見ると生石さん

「……俺どうしたらいいですかね……」

「本当はもう、わかってるんじゃないか？」

「わからないから聞いてるんですよ！」

少し気が立っていたのだろう、強く言い返してしまった。

「落ち着け、お前がわからないのに俺が知ってるわけないだろ」

「そうですね……ごめんなさい少し熱くなっちゃって……」

最悪だ、いくら余裕がないからって強く当たってしまった。

「お前の気持ちはお前にしかわからない、よく考えて自分のしたいよ
うにすればいい」

「でも、それだと姉弟子の迷惑に……」

深く考えずに発した言葉だったが、こんな言葉が出る時点で俺の答
えは決まっているのだろう。

「お前の姉弟子は告白をされたぐらいで弱くなっちゃまう棋士なのか
？」

「……いいえ、姉弟子はとても強い棋士です」

完全に告白する流れになってきている。

これは、生石さんが上手いのか、それとも俺が流されやすいだけな
のだろうか

「八一！ 男、見せてこい！」

「はいー」

その言葉に後押しされ、俺は姉弟子に会うために走りだそうとして
いると、生石さんに腕を掴まれ引き留められる。

「どこ行くんだよ八一」

「姉弟子の所にです！」

男を見せろと生石さんが言ったはずなのに何を言っているのだろ
う

「何言ってるんだ、お前は今から俺の代わりに指導対局をするんだぞ」
「えっ？」

意味がわからない、俺は一分一秒でも早く姉弟子に会いに行かなければ
ならないのに

「実は少し用事があったな、少し出ないといけないんだ」

「でも、男を見せろって生石さんが言ったんですよ！」

「別に今日とは言っていないぞ」

やられた、生石さんにまんまと一杯食わされてしまったようだ。

「それじゃあ八一、後よろしくな」

生石さんはそのまま近くにあった上着を手に取りそのまま出て
行った。

「……………まんまと利用されちゃった」

ちゃんと相談に乗ってくれた分、断わることができなかった。

「……………ししよー……………」

気がつけば、お客さんとの対局が終わっていたあいが見の前にい
た。

「どうしたんだ、あい？ 悪いんだけど、店番引き受けちゃったから帰
るのはもう少しまっててね」

「それはいいですけど、ししよー、一ついいですか？」

「なに？」

気のせいかもしれないけど、あいの元気がなさそうに見える。

いつも笑顔のはずなのに心なしか表情も暗い

「空先生のこと好きって本当ですか？」

いつも通り笑顔で言うあい、だがその笑顔は普段のとは似て非なるものだった。

告白

「それで、ししよー、さっきのは本当なんですか？」

「さ、さっきのって？」

あいはものすごい剣幕で俺の前に立っている。

いつもは天使のようなあいま今は悪魔に見える。

「とぼけても無駄ですよ、師匠」

「……………どこまで聞いていたんだ？」

もう逃げ道は無い、周りで将棋を指していたお客さんいつのまにかいなくなっており、あいと俺の2人しかいなかった。

「全部ですよ、最初っから最後まで」

「……………」

あいは即答し、俺の逃げ道をさらに閉ざしてくる。

俺はもう黙るしかなかった。

「師匠は本当に空先生のこと好きなんですか？」

「……………ああ」

言うしかなかった。

このまま黙っていれば、前言っていた通り、本当に拷問でもされるかもしれない

「そうですか……………」

なにか考えこむように言うあひ、俺に対しての罰でも考えているのだろうか？

そうだとしたら怖すぎる。俺は冷や汗が止まらなかった。

「いつから好きだったんですか空先生のこと？」

想像していたのは違ったが、とりあえず痛い事はされなさそうだ。

「つい最近だよこの気持ちに気付いたのは…………でも、多分俺は気付いてないだけで、ずっと前から姉弟子のことが好きだったんだと思う」
ふいにあいの方を見るとその顔は今にも泣きだしそうになっていた。

「し、ししよーは私のこと好きですか…………？」

「ああ、好きにきまつてるじゃないか」

あいは自分のことが好きか聞いてきた。

けど、あいの言う好きと俺の思う好きの意味が根本的に違うものと俺は気づいていた。

「……………どうして私じゃダメなんですか!」

珍しく声を荒げて言うあい、きつとあいは俺の言う好きが自分の好きと違う事に前から気づいていたんだろう。

「私の方があの人より料理店もできるし、…………胸だつて私の方が大きくなると思います!将棋だつてあの人より強くなります!……………それでもだめですか?」

どんどん声を震わせ泣きながら言うあい

「……………ごめん」

「な、なんで…………私じゃだめなんですか…………」

謝ることしか俺はできなかった。

「俺は姉弟子が好きなんだ。だからあい気持ちには答えられない」

これが、真剣に告白してきたあいに対する俺の精一杯の答えだった。

「……………私、師匠が空先生のことが好きだつて知ってました」

泣き止んではいるが、まだ涙声で言うあい

「当たり前ですよね…………私なんかより空先生の方がずっと師匠と長く一緒にいます。私の何倍も師匠と将棋を指しているから…………」

そんなことないと否定するのは簡単だったが、それを言う資格は俺には無いだろう、きつとそんな事を言つてもあいをもつと悲しませてしまうだけだ。

「ししよー、そんな顔しないでください、ししよーは悪くありませんから」

こんな時、なんて言えばいいのわからない自分の経験の浅さに嫌気が差してしまう。

こんなに幼い子が俺に気を使っている、自分の方がよっぽど辛はずなのに

「でも、よかったです。師匠の気持ちをちゃんと聞けて」

「本当にごめん……」

まったく情けない、いつも師匠ぶってるクセに肝心な時はこれだ
「どうして師匠が謝るんですか？ それと、今思い出したんですけど
今日、桂香さんの所に行く約束をしていたので私、行ってきますね」
「わかった。桂香さんに迷惑かけないようにね」

あいは俺の方を振り返らずにゴキゲンの湯を出て行った。

一瞬見えたその横顔には涙が流れていた

「桂香さん、だれか来たみたいだけど」

暇つぶしのために軽く将棋をしていた所に清滝家のチャイムが
鳴った。

「ほんと？ ちょっと行ってくるわね」

そう言う桂香は玄関の方に向かった。

いったい誰だろう？ 八一だったりしたら嬉しいな。

そんなことを考えているうちに玄関の方から桂香さんの声が聞こ
えてきた。

「どうしたのあいちゃん!？」

「ご、ごめんなさい……わ、私……」

玄関から桂香さんの驚く声とあの小童の泣きながら話す声が聞こ
えた。

いくら宿敵の小童と言えど流石に少し心配なので私も玄関の方に
行ってみることにした。

「あ、銀子ちゃんも来てくれたのね。事情はわからないけど、なんかも
のすごく泣いちゃって」

「ふくん、それで何があったの小童？」

小童の目は充血してなおも、まだ涙を流している。

「——れました」

「ごめんあいちゃん、きこえなかったわ。もう一度言ってもらえる？」
小童の声は泣いている影響か声がかすれていてほとんど聞き取る

ことができなかつた。

「し、師匠に……フラれ……ました」

「小童、それ本当なの？」

驚いた。小童が八一の事を好きなのは知っていたが、まさかこんなに早く告白するとは思わなかつた。

「はい、他に好きな人がいるって……」

「ちよ、ちよつと聞こえなかつただけ、小童、もう一回言ってみなさい」

今とんでもない事を聞いた気がする、聞き間違いだろうか？

念のため聞き返してみる。

「師匠が、他に好きな人がいるから、私の気持ちには答えられないって」

私は一瞬にして頭が真っ白になった。

八一に好きな人がいるなんて……あの時は、いないって言ってたのに

八一がほかの人に奪われてしまうなんて絶対嫌だ。

そんな考えが頭を巡り、どんどん気分が悪くなってくる。

「銀子ちゃん、あいちゃんを2階に連れてくからちよつと待ててね」

「うん、わかつた」

桂香さんはそのまま小童の手を引き、階段を上がって行く。

あの小童だつて私に泣き顔なんてあまり見せたくないだろう、本当に桂香さんがいて助かつた。

「……あれ、ほんとなのかな？」

さっきのことが頭から離れない

八一の好きな人って誰なんだろう、万智さんだろうか、それとも月夜見坂さんか、八一は昔から優しい歳上の女性が好きだったから、そうなることやっぱり万智さんなのだろうか。

「……勝ち目が無いじゃない」

私が万智さんに勝っている部分なんて将棋が強いことくらいだけだ。

家事だつて、社交性だつて、スタイルだつて万智さんの方が全部

上だろう。

ダメだ、自分でものすごく弱気になっていることがわかる。

「ごめんね銀子ちゃん、待たせちゃって」

すると、桂香さんが階段から降りてきた。

「あいつは？ 大丈夫だったの？」

「疲れてたのか、すぐに寝ちゃったわ」

ウジウジ考えていても仕方ないので、一旦考えるのをやめて小童のことも気になっていたし、そっちの方に頭を切り替えた。

「なんか、八一君と生石先生の所に行ってたらしくてね、そこから一人で泣きながら帰ってきたみたいなのよ」

「……そうなんだ」

つまり、生石さんの所で告白したことになるんだろうか

いったいどんな経緯でそんなことになったんだろう、生石さんに聞けばわかるかもしれない

「ねえ、銀子ちゃん……八一君のこと知ってた？」

「……知らなかった」

桂香さんも八一のことが気になってたんだろう、桂香さんなら八一の好きな人について何か聞いてるかと思っただけど、この様子じゃあ私と同じで今知ったみたいだ。

「まさか、八一君に好きな人がいるなんてね」

「……うん」

「銀子ちゃん、諦めちゃダメだからね！」

私の様子を察してか励ましてくter桂香さん

「これは、あの計画を実行するしかないわね」

「なに？……計画って」

企むように笑みを浮かべ言う桂香さん、正直あまりいい予感はない。

「銀子ちゃんは気にしないでいいわよ、それに直ぐにわかると思うわ」

その日の桂香さんとの会話はここで終わり、小童が師匠の家に泊まるらしいので私はなんとなく気まずかったので家に帰った。

買い物

「本日は急にお呼びたてしてすみませんね竜王に女流二冠」

「それはいいのですが、会長、私達にお話とはいったいなんなのでしようか？」

実は今日、会長の方から俺と姉弟子になにやら仕事のお話があるらしくこうして姉弟子と一緒に会長の所に来ていた。

「私と九頭竜先生が一緒、という事は大盤解説の仕事とかでしょうか？」

続いて姉弟子も会長に質問する。に

最初は俺も大盤解説のお話かと思ったが、その程度と言っては失礼だが、それだけでわざわざ俺と姉弟子

のことを呼だろうか。

「お二人ともご存じかとは思いますが、毎年行われるタイトル戦、それは各地の旅館やホテル、神社など様々な場所をお貸し頂いてますよね？」

「はい、でもそれがどうかしたのでしょうか？」

先ほどまでの話と一切関係の無さそうな話しに、戸惑っていた俺に見かねたのか姉弟子の方が返事をした。

「将棋界での一番のイベントそれがタイトル戦です。そのため、その会場を選らばさせて頂く時には念入りな下見が必要となります」

「……会長もしかして」

会長の口ぶりから、何のために俺達をここに呼んだ理由はなんとなくわかった。

姉弟子の方はというとの、会長の言いたい事がまだわからないのか若干首をかしげている。

「流石竜王、察しが良くて助かります」

「いったい、どういうことなんですか？」

会長に対し、少し問い詰めるように言う姉弟子。

姉弟子は、将棋を指している時とは違い、案外こういう時の察しは悪かったりする。

「竜王は薄々わかっていると思います。お二人にタイトル戦の際にお貸し頂く予定の旅館の下見に行つて来てもらいたいのです」

「……どうして私達なんでしょうか?」

姉弟子の疑問は当然だ、別に俺達は旅館の評論家でもなんでもないのでなぜ白羽の矢が立ったのか俺も疑問に思っていた。

「お二人は竜王に女流二冠、それなら各地の旅館に行く機会も多いでしょう?」

「いや、そうですけど……」

別に疑っているわけじゃないけど、わざわざ俺と姉弟子に行かせる辺り、なにか裏があるんじゃないかと思つてしまう。

「俺は、行つてもいいかなと思つてんですけど、姉弟子はどうですか?」

こちらとしては、姉弟子と旅館に行くなんて大歓迎なものだが、姉弟子の方が俺となんて行きたくないだろうし、勝手に引き受けるわけにはいかないだろう。

「八一が行くなら私も行くわ」

いまいち、こういう言い方をされてしまうと、俺だけかもしれないけど素直に、行きましようとは少し言いにくかったりする。

「女流二冠は行つてもいいんですけど、どうしますか竜王?」

「わかりました。お引き受けします」

会長の方から切り出してくれて言いやすかったのだが、どこか、俺と姉弟子に行かせようと誘導しているようにも見えてしまう。

「旅館のことなんですが、私の内弟子である、あいと一緒に連れて行つてもいいですか?」

行くのはいいが、あいのことを1人で待たせることはできない。

「そのことなんですが、急遽だったもので二人部屋しか用意できないそうなんです」

「え、そうなんですか!?!」

どうしよう、流石にあいを待たせておくわけには行かないし……

「安心してください竜王、実は先日お二人もご存じである、桂香さんにお会いした時にこの事を話してみたら、あいさんのことを快く預かつてくれるそうです」

「よかった。それなら安心です」

毎回、毎回、桂香さんにはいつも迷惑をかけてしまう。いつかちゃんと恩返しをしてあげたい。

「……………もしかして桂香さんの言っていたのって…………」

「ん？ 姉弟子今なにか言いました？」

「別に、なにも言っていないけど」

たしかに、小声でなにか言っているように聞こえたけど、俺の気のせいだったのだろう。

「会長、下見に行く旅館の場所はどこなんでしょうか？」

「沖縄です」

「お、沖縄ですか!？」

県外の旅館である事は知っていたが、流石に沖縄だとは思っていなかった。

「それでは、お二人ともよろしくお願いしますね」

「ちよつと姉弟子、買い物って何を買うんですか？」

「いいから、ついてきなさい」

会長との話しが終わった後、姉弟子に買い物に行くと言われ近くのショッピングモールに連れて来られていた。

「ほら八一、着いたわよ」

「あ、姉弟子、ここに…………」

姉弟子に言われるがままついて行ってみると、そこはショッピングモールの一角にある水着売り場だった。

「ほら、早く入るわよ」

そう言い早い足取りでお店の中に入って行く姉弟子

「姉弟子、買い物って水着なんですか？」

「そうだけど、悪い？」

そう言いながら淡々と水着を選んでいる姉弟子、正直結構気まずいものがある。

周りを見ると女性用の水着だらけで男物のやつは少ない、そのためか、店内にいるお客さんのほとんどが女性だった。

「八一、ちよつと試着してみるから来なさい」

「は、はい、わかりました」

これは、俺の意見を聞きたいという風に受け取ってもいいのだろうか？

「……覗くんじゃないわよ」

「覗きませんよー！」

そう言い姉弟子は試着室の中に入り、カーテンを閉める。

さつきは周りに気を取られて姉弟子がどんな水着を試着するのかわからないので少し楽しみだったりしている。

「……八一、どうかな？」

カーテンを開けて、出てきた姉弟子の姿に俺は目を奪われてしまった。

いつもなら着ないような、フリル付きの白を基調とした青い水玉模様の水着を着た姉弟子だった。

その髪色と真っ白い肌も相まってか、妖精だとか天使みたいな、まるで同じ人間とは思えない美しさだ。

「……やっぱり、似合わないかな？」

俺の反応がないから不思議に思ったのだろう、不安そうに言う姉弟子

「そんなことないです！ 姉弟子、すごい可愛いですよー！」

「ほんと？ 八一が何も言わないから、可愛くないのかと思った……」

いつものトゲトゲした態度は見る影もなく、可愛いことを言う姉弟子、つい男心をくすぐられてしまう

「違いますよ、姉弟子がすごく可愛から、見惚れちゃってたんです」

「……バカやいち」

照れているのか顔が真っ赤になっている姉弟子。自分でもすごいキザなことを言っている自覚はあったが、そんなことを気にさせないぐらい姉弟子が可愛かったのだ。

「……八一が言うならこの水着にしようかな」

試着室の中にある鏡を見ながら言う姉弟子

「どうせなら、もうちよつと試着してみませんか？」

「えっ!？」

この水着姿もすごく好みなのだが、俺も男だもつといろんな姉弟子を見てみたいと思い、言ってしまった。

「どうですか？ もつと気に入るのがあるかもしれませんよ」

「……じゃあ、もうちよつと着てみようかな……」

この後の展開は予想できる通り、桜ノ宮と時みたく2人とも変なテンションになってしまい、他のお客さんの存在など忘れ、姉弟子の水着ショーを楽しんでいた。

店員さんに少しうるさい注意され、恥ずかしくなった俺と姉弟子は最初に試着した水着を買い、逃げるように店から出た。

返り道、姉弟子は一切、口を聞いてくれなかった。

旅行

今日、俺と姉弟子は先日会長に頼まれた通り、タイトル戦の会場の候補の一つである沖繩の旅館の下見をするべく数時間飛行機に乗り、今空港に到着したところだった。

「いやー気持ちいいぐらいの快晴ですね」

「そうね、ちよつと日差しが強い気がするけど……」

空港から出ると、姉弟子はすぐさまいつもの日傘を開く

それもそうだろう、流石は沖繩というべきなのか3月下旬にもかかわらず気温も高めで日差しも少し強い、海開きも始まっているくらいだ、日光が苦手な姉弟子には日傘なしでは少し辛いだろう。

「荷物もありますし旅館のほうに向かいますしようか」

「そうね」

そう言い俺と姉弟子は空港の出口のすぐ近くにあるタクシー乗り場へと向かう、今回下見に行く旅館は那覇空港からちよつど車で30分位の所にあるので、流石に徒歩で行くのは厳しいのでタクシーに乗って行くようにと男鹿さんに言われていた。

「すいません、松澄という旅館までお願いします」

「はいよ」

ちよつどタクシー乗り場に1台止まっていたので乗せてもらい、すぐに行き先である松澄旅館までお願いする。なんでも今から行く松澄旅館は沖繩でも数少ない和風の旅館らしい

「お二人で旅行ですか？」

するとタクシーの運転手さんが話しかけてきた。

年齢は20代後半くらいの少し小ぶり男性だった。

「そうなんです。まあ半分以上仕事なんですけどね」

正直仕事なんて抜きで姉弟子と旅行に行きたかったが一緒に行けるだけで十分だ。それに俺が個人的に旅行に誘う勇氣なんて出来ないし、誘ったところで来てくれないだろう。

「あれ、お客さんもしかして……」

運転手の人横目で俺の顔を見ながらなにか考え込んでいる。俺の顔になにか変なものでもついていたのだろうか？

「やっぱり！ 竜王の九頭竜八一さんですよね！ てことは隣にい
らっしゃるのが女流2冠の空銀子さんですか」

「そうですよ、よくご存じですね」

どうやら運転手さんは俺達のことを知っているらしい、姉弟子の方はというと、退屈そうに外を眺めていた。

「つまり今日はお二人でお忍び旅行ってことですか」

「違いますよ、仕事です。それに姉弟子と旅行なんて仕事じゃないと
行きませんよ」

その瞬間俺の横腹に姉弟子の鉄拳が炸裂した。

「死ねロリコン！ 頓死しろ！」

「痛っ！ 何するんですか姉弟子！」

正直お互いに時間があるわけでもないし、姉弟子も俺のことをただの弟弟子としか思っていないだろうから一緒に旅行なんて仕事じゃないと行くことはできないのにどうして姉弟子がそんなに怒っているのか分からなかった。

「お客さん、ちよつとは女心を勉強した方がいいと思いますよ」

「……はい」

正直まだ姉弟子を怒らせてしまったのかはわからないけど、
運転手さんにも言われるくらいだから俺が悪かったのだろう。

「けっこういい所ですね」

「そうね」

受付を済ませて自分たちの部屋に案内され中に入った。

事前に話しあっていた通り案内された部屋は一部屋であった。

最初、男鹿さんは二部屋用意するつもりらしかったんだが、俺がない時に姉弟子が一緒に部屋でいいと言ったらしい。いくら小さい頃に一緒に寝ていたからといって流石に今となると少し恥ずかしいし、どうしたらいいかわからない。

ましてや自分が好きな女の子だ緊張するなという方が無理があるだろう。

そういう風に見ると姉弟子は本当に俺のことをなんとも思っていないんだろうと再認識してしまう。

「見て八一海が見えるわよ！」

「綺麗ですね、後で行ってみましようか」

この旅館は3階建ての旅館で俺たちが案内されたのはちようど3階で歩いてすぐ近くにあるビーチが見えるようになってる。

「今は暑いから行くのは夜がいいわ」

「そうですね、まだ3時ですし夕食まで時間がありますね、どうしましようか？」

夕食の時間は6時、あと3時間ほどなのでそんなに遠くまで行く時間はないし、かといってそれまで旅館で待ってるのも仕事とはいえ、せつかく沖繩に来たのにもったいない気がする。

「なら、この辺りを散歩してみましよう」

「いいですねそれ」

思えばこの時からだろうか、俺は少し姉弟子の様子に少し違和感をもっていた。

「姉弟子、今日随分と機嫌がいいですけど何かいいことでもあったんですか？」

「なんで？別にないけど」

姉弟子と散歩している時にそう思った。

思い返せばタクシーの時こそ少し怒らせてしまったが、それを除けば機嫌がいいというかテンションが高いというか、いつもと違うのはあきらかだった。

「八一、あそこで少し休んでいきましよう」

姉弟子がそう言い指をさした先には公園があった。

「そうですね少し休憩していきましようか」

そこは住宅街に囲まれた小さな公園で滑り台やブランコがあり数

人の子供達が遊んでいた。

「なんでしよう、こういう所だから行き当てもなく散歩しているだけで楽しいですね」

「そうですね」

姉弟子と俺は公園にあったベンチに座り少し休んでいた。

ちょうどベンチの周りは公園の大きな木のおかげで日陰になっており涼しかった。

「そういえば私達はあまりこういうところでは遊ばなかったわね」

「ずっと将棋ばっかだったし、そういえばそうですね」

公園で遊ぶ子供達を見てそう思ったのか姉弟子がそんなことを言ってきた。

「2泊3日ですし、明日はどこか遊びに行ってみますか？」

「うん、いいかも……」

やっぱりおかしい、すごく機嫌がいいと思えば、今はどこか上の空というか黄昏ているように見えた。

「姉弟子本当に大丈夫ですか？体調が悪かったら言ってくださいね」

「なに言ってるのよ、ほら、もう行くわよ」

そう言って姉弟子はベンチを立つ、それにつられて俺も急いでベンチを立つ

「本当に大丈夫ですか姉弟子、なにか変ですよ」

「別に、なにもないわよ」

姉弟子は早歩きで俺の前を歩く、それを追いかけるように俺も早歩きになる。

具体的にどこがおかしいとか、なにが変とか分からないけど、やっぱりいつもの姉弟子とはどこか違った。

夕食が終わり姉弟子と約束していた通りに海を見に来ていた。

「すごく綺麗ね八一」

「そうですね」

海はすごく静かで、俺達の話し声は響き渡ることなく溶けるように消える。

その静かさと、うす暗く姉弟子の顔もうつつすらとしか見えなく、うみは綺麗だったけど、すこし不気味にも思えた。

「姉弟子、泳がなくていいんですか？」

姉弟子は先日購入した水着の上にパーカーを着て、隣で両膝を抱えて座っている。いわゆる体育座りと呼ばれる座り方だ。

「いいわ、別に見てるだけで」

「せっかく水着似合ってるのにもつたいないですよ」

「ねえ……私の水着もつと見たい？」

姉弟子のその言葉に俺の心臓は大きく跳ねる。

「な、なに言ってるですか！ からかわないでくださいよ！」

自分の動揺を隠すようにそう言うが、姉弟子はじつと俺の方を見ている。

「そうよね、八一は私の水着なんかより女子小学生の水着の方が見たいんだもんね」

「ち、違います！ 勝手にロリコンにしないでくださいよ！」

「えっ！ 違うの？」

姉弟子は不思議そうに驚いている。

「まったく、いい加減にしてくださいよ……」

そう言い姉弟子の方を見るとさっきまでの俺をからかっていた姉弟子はいなくなり、とても暗い顔をしていた。

「急にそんな顔してどうかしたんですか姉弟子？」

「八一はさ、私が勝てると思う？」

はつきりとは言っていないが、俺は姉弟子がなにを言いたいのかすぐにわかった。

「あそこにいる人達はみんな、命を削って指しています。そんな人達を相手に無責任に勝てるなんて俺は言えないです」

「……そうね」

それから姉弟子は一言も話さず、突然、寒いから返ると言い旅館に戻った。俺はなんとなくついて行きずらかったので時間をずらして戻ることにした。

この時の俺は自分がなんとなく言った言葉がどういう意味かまだ理解していなかった。

姉弟子だって文字通り命を削って将棋をしている。なにかを得るには何かを捨てなければならぬ、これ以上姉弟子に何を捨てろと言うんだ。なにを削れと言うんだ。

姉弟子ならきつと勝てます。俺は信じてます。そんな無責任な言葉を言うべきだったんだ。

姉弟子はそんな無責任な言葉を待っていた。自分でもわかっているはずなのに、俺までそんなことを言ったら、姉弟子がどうなるか、よく考えればわかることだったのに……………

